

como el agua

@びわ湖ホール

芸の道に終わりはない。極めることなどできないだろう。だが、極みを求めることは誰にでもできる。魂の極限を求めるフラメンコダンサーのsiroco、曲芸の境地を目指す元シルク・ド・ソレイユのASA。今宵、二人のダンサーによるコラボレイトを、人は「極芸」とよんだ。

今宵のbaile（踊り手）の一人、sirocoが、ギターのカロスリズムとバルマ（拍手）、そしてcante（歌）に乗せてフラメンコを踊る。フラメンコはスペインの流浪の民・ヒターノの音楽。「魂の叫びを表現できる」から、そして何より「人間臭い」からこそ、sirocoはダンサーとしてフラメンコを選び、スペインで学んだ。表現するのは人間そのもの。そして、喜び、悲しみ、人生そのものである。一方、ASAは一言で言えば流麗。sirocoを動とすれば、ASAは静。ティッシュ（絹布を使ったアクロバティックダンス）の表現には、流れるような曲線美、そして人間美があふれていた。

その二人が舞台上、一瞬の邂逅を見せる。文化も背景もまったく異なる二人の踊りが、como el agua＝「水のように」シンクロしていく。今宵のハイライトはこの刹那であった。ある人は人生の喜怒哀楽をそこに感じただろう。ある人は男女の出会いや別れを思い浮かべただろう。

表現する者＝アーティストの作品の行き着く先は自己満足であるかもしれない。だが、優れたアートとは作品の発するエナジーが、その人の心の在り様を心の内に描かせるもの。今宵、「極芸」は観客それぞれにエナジーを放出し、観客それぞれが様々な心象を思い浮かべた。たったそれだけのことだったかもしれない。しかし、概念、形式、知識、理論…と足かせが多い世の中で、これだけ素直にアートと向き合えたことがあったのだろうか。

本来、アートに説明はいらない。ただ感じるだけでいい。それを見事に体現した「極芸」の一夜だった。

心が震える、
魂が揺さぶられる、
「極芸」の果てに
人は何を感ずるのか？



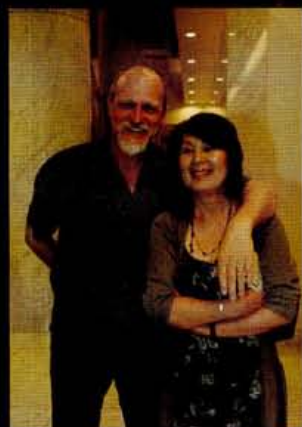
端整で甘いマスクを持つ若千25歳の京都出身ダンサーsiroco、ヒップホップ、コンテンポラリー・モダンから一転、フラメンコをスペインで学ぶ。踊りの幕間では舞台袖で割れこむほど、全身全霊で「人間」を表現した



アメリカ出身、京都市育ちのASAは、飛び込みのジュニアオリンピック優勝経験も持つ。シルク・ド・ソレイユの「キダム」のメンバーにも選ばれた。脅威の身体能力を活かした表現力とティッシュの大胆さに、見る者も言葉を失う



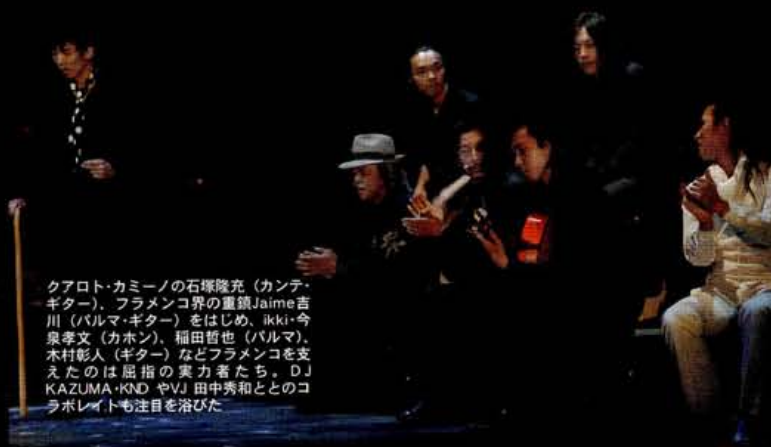
Jaime 吉川さんの奥さまに指南を受けているという小北さん親子。とにかく「キレイ！」が共通の感想で、「影や映像が特にキレイでした」と、舞台演出にも言及されていた。舞台の外で奮闘したスタッフも報われたことだろう



あの～、日本語は？「難しい言葉はわからないです」って、ムチャクチャ流暢じゃん！と思ったら「Papa Jon's」のオーナー、チャールズ・ロシェさんと奥さまでした。「ASAはちょっといときから知ってるんです。今日も一緒に帰ります」



ケントさん(左)とトモミさん(右)はsirocoが通うスポーツジムのインストラクター。「フラメンコをレッスンに取り入れてみよっか？」とトモミさん。「身体能力に自信はあるけど、リズム感が問題」とケントさん



クアトロ・カミーノの石塚隆彦(カンテ・ギター)、フラメンコ界の重鎮Jaime 吉川(バルマ・ギター)をはじめ、ikki・今泉孝文(カホン)、福田哲也(バルマ)、木村彰人(ギター)などフラメンコを支えたのは屈指の実力者たち。DJ KAZUMA・KND やVJ 田中秀和とどのコラボレイトも注目を浴びた

